

制作概要

『なぜ創る、何を表現するのか』を永遠の命題と考えてきた。しかし、それはあくまでも自分＝自我を前提とする考えであって、自分を越えたものを表現しようとする時、その考えでは説明がつかなくなってくる。

発想はあくまでも直感によって導かれる。それを具現化するために自分の考えを巡らさざるを得ないところが未熟なところであるが、最初に見えてきたイメージこそが表現されるべきものとわかる瞬間が最後には訪れる。それは、何とも表現のしようのない遭遇とでも呼ぶしかないものかもしれない。

作家・作品は文脈の中で語られるものである。つまりは、永遠に変化していくものである。なぜならば、世界は常に動いているからだ。

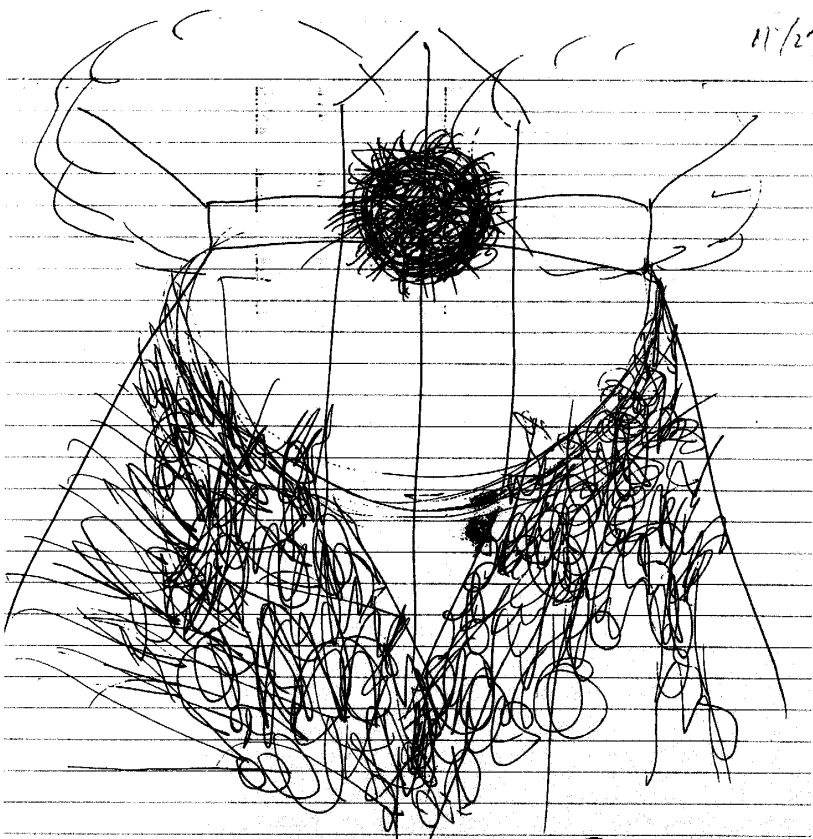
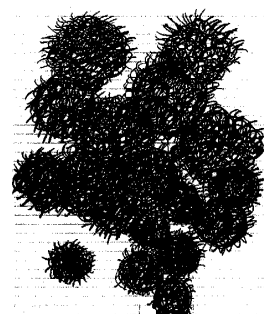
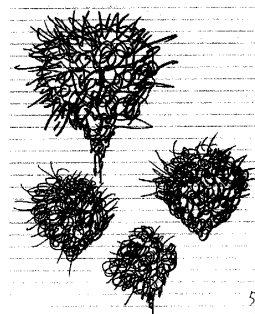
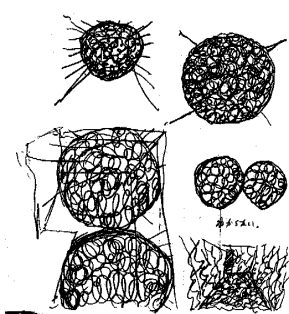
今回の作品は、2004年の個展と2006年に予定されている作品の中間点に当たる。中間点ではあるが、これまでのインスタレーションによる表現の一つの終着点であったようにも思われる。ここでは、本来主役を勤めるはずの金属線によるオブジェが、床と壁面に現れた影のためのものとなったからだ。一筋毎にさばかれ床に設置された繊維の集積も、それもまた影を表現するものであった。

さて、この影はなにか？影というからには、光ではなく、そのもととなるものの存在があるはずだ。それが何なのか気になるところである。

青野 卓司

SPIRITUALITY

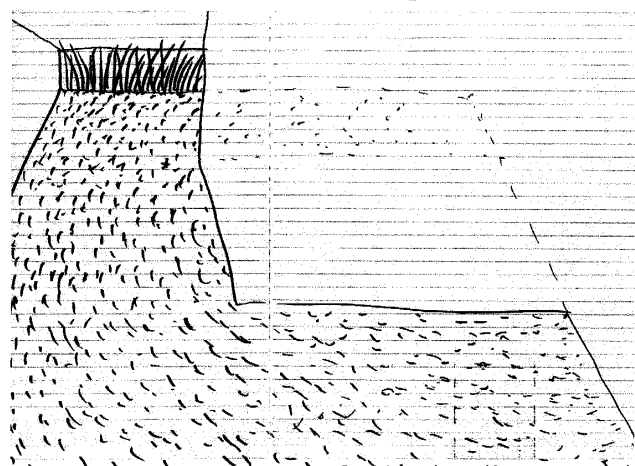
ギャラリーはねうさぎ(京都)

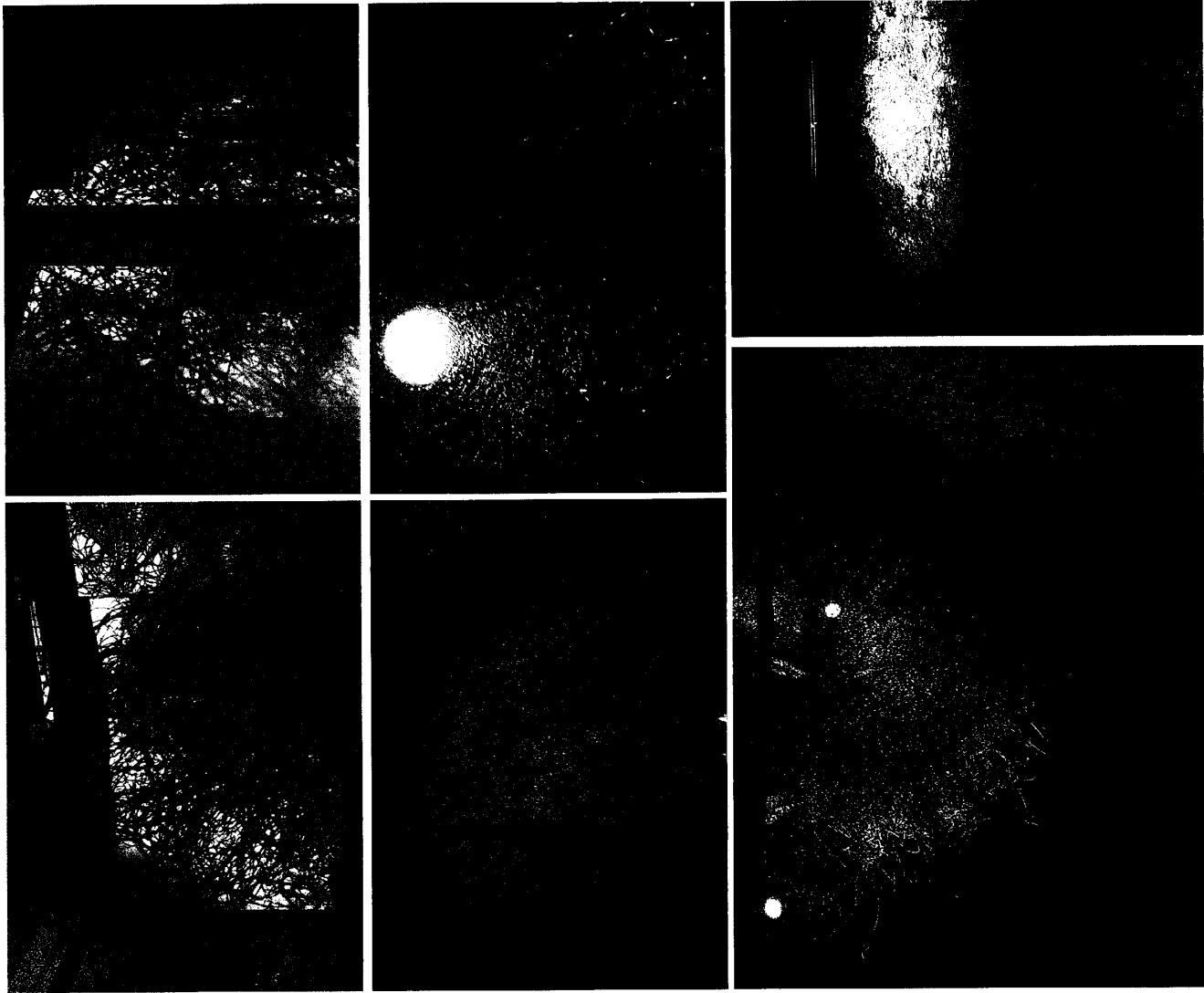


自由細胞 → 黒=OK
 → 赤?
 ↓ 染色
 OK
 ボウのバリエーション

[illegible]

一生を愛する。 死ぬまで。
フクリ、フクリ、
作品、作品、作品。
11. 死ぬまで、死ぬまで。 生命の愛。
生命の愛。
生命の愛。





青野 卓司
SPIRITUALITY
2005年
麻織維・針金
「青野卓司個展」ギャラリーはねうさぎ（京都）

